

『天草版平家物語』と『大蔵虎明本狂言集』 における「シテゴザル」形式の意味

李 忠 均

0. はじめに

『天草版平家物語』は、文禄元年（1592）、天草のイエズス会学林で刊行された平家物語のポルトガル式ローマ字表記の抄訳本であり、ポルトガル人宣教師のための日本語と歴史の教科書として編まれた。『大蔵虎明本狂言』は、寛永19年（1642）に大蔵流狂言師の大蔵弥右衛門虎明が書き留めた「虎明本狂言集」と呼ばれる狂言の台本であり、両方とも中世の日本語を知る上でも重要な書物であり、中世語から近世語まで変わっていく確立過程が見られるということから、シテゴザル形の考察の対象に値すると期待される。

まず、本動詞としての「ござる」の意味について1603年刊行された『日葡辞書』[注1]を引いてみると、尊敬すべき人が行く、来る、(…の状態位置に)ある、居る、あるいは、(質的に…で)あるのように説明されている。なお、金水(2004)によると、「ござる」は室町時代に「御座+ある」という尊敬語から始まり、室町時代末期になると、尊敬の意味以外にも丁寧・丁寧の意味が加わったという。現代語においては、「ございます」という形式として丁寧・丁寧の意味を表しているということは言うまでもない。

また、補助動詞として用いられるシテゴザル形のなかのゴザルは、山本(1955)によると、補助動詞アル・イルの丁寧語であることが一般的な規定[注2]である。

そのように尊敬語から丁寧語に変わることは、金水(2006)でも指摘されており、特に存在文の分析に基づき、『天草版平家物語』のシテゴザル形について原拠本[注3]である『平家物語』との比較を通して、つぎのように述べている。

尊敬の用法を持つものは、野村(1994)の言う(空間存在に近い)「存在様態」を表すものであり、すなわち存在動詞「ござる」の文法化が余り進んでいない例であることが分かる。一方、丁寧あるいは中立の用法と対応するものは、存在の意味から離れてパーフェクトや過去など十分文法化した例が多いと言える。丁寧の例では無生物主語が現れるのに、当然ながら尊敬の場合には有生物主語しか許されないという点でも、文法化の進展との関連が知られるであろう。ここで「ご

ざる」の文法化の進み具合と、敬語的意味の分布が相関していることが分かってくる。

一方、菊地（1994）は、「ござる」の補助動詞用法の場合、補助動詞「ある」をさらに丁寧な形と位置づけることはやや無理があると指摘している。これは、「奥様、ばあやが言は当たりましてございましょう」（徳富蘆花『不如帰』）のように、「ある」の丁寧な形とはいえない例もあるからだと説明する。

『天草版平家物語』のなか、特にシテゴザル形の場合、原抛本での比較を通して判別することができない例も表1のように少なからず存在する。そういう例は、主に段落を終結する際、喜一検校が右馬允に対する台詞に集中して現れる。また、シテゴザル形と対応する原抛本の形式にケリ形や助動詞などが付いていないいわゆる「はだかの形」などが見られるのは、シテゴザル形が十分に補助動詞としてアスペクト的意味を表していないとも考えられる。

原抛本 天草本	シテアル	シテ候	タリ	ケリ	はだか	対応無し
シテゴザル	6	47	8	35	32	61

<表1>

本稿では、シテゴザル形について、語り手が話を進めていくという似たような形式を持つ『天草版平家物語』と『大蔵虎明本狂言』から見られるシテゴザル形を、それぞれアスペクト的な意味を表しているか否か、アスペクト的意味のある際は、どのようなアスペクト的意味であるかなどに注目しながら、比較することを目標とする。

次の節からは、アスペクト的意味によるシテゴザル形の分布について考察してみる。アスペクト的意味は、進行・結果存続・単なる状態・パーフェクト[注4]・完成相などに分けて調べてみる。

1. 『天草版平家物語』

1. 1. 進行

アスペクト的に進行の意味を表しているのは10例があり、それに接続するのははやす、泣く、笑う、読誦するなどの主体動作動詞である。

(1)その人が右の如くに、御前において舞はれたれば、それもまた公卿躰拍子をかへて、

「あなくろぐる黒き頭がな。いかなる人の漆ぬりけん。」というて、はやされてあつた。… また公卿達の細工に、「播磨米は木賊か、椋の葉か。人の綺羅を研ぐは。」と云うて、はやされてござつた。(7-14)

- (2) 少将「いとな泣いそ。宰相殿のさてござれば、命ばかりはさりともしも請ひ受けられうずる。」と慰められるれども、人目も知らず、泣き悶えられてござる。(37-18)
- (3) それも叶はなんだによつて、「たとひ重科を蒙つて遠国へ行くものとても、人一人身にそへぬ事があるか。」というて、車のうちでかきくどかれたれば守護の武士共も皆鎧の袖をぬらいてござる。(53-18)
- (4) 皆公卿達、「あれには天狗がついたか。」というて笑はれてござつた。(221-18)
- (5) その頼朝朝持仏堂にお経誦讀してござるところに、千手が帰参つたを御覽ぜられて、「頼朝は千手に面白い中人をしたものかな」と仰せられたれば、親義といふ者があなたにものを書いてみたが、「何事でござるぞ」と申せば、(304-7)
- (6) [母上]斎藤五、斎藤六はただ聖を生身の仏のやうに思うて、三度伏し拝み、よろこびの涙を流し、大覚寺へ参つてこの由を申せば、嘆き沈んでござつたが、(388-17)

例(1)の主体は「公卿」であり、アスペクト的には動作の継続の意味を表わしている。この例は過去形をとっていて、「五節の時」だという語り手が設定した過去の視点の中で行われる出来事である。ちなみに、原拠本でもケリ形が用いられており、意味的にも進行性を持っている。なお、原拠本では、引用部分に同じ表現「はやされる」が2ヶ所現れるが、天草本では、これが「はやされてあつた」、「はやされてござつた」と表現し分けられている。両方とも原拠本の表現だけでなく、テンス・アスペクトの意味も一緒であるが、シテゴザル形の方は語り手の喜一検校が聞き手である右馬の允に対し、丁重・丁寧表現を使っているとみられる。

例(3)は、成親は重盛のとりなしにより、死罪はまぬかれたが、備前の鹿島に流されるようになり、出発する前、重盛に会いたいと願う場面である。この例に対応する部分が原拠本では過去の意味を表わすというケリ形であるが、天草本ではシテゴザルが用いられており、実際に天草本ではその場面に視点をおき、現在のことのように語るというふうに描き方を変えていると解釈でき、アスペクト的に進行の意味を持っていると思われる。

1. 2. 結果存続

シテゴザル形のなか、結果存続の意味を表しているのは、8例であり、上接するのは預け置く押し差す、切る、陣をとるなどの動詞である。

- (7) 忠盛その時申さるゝは、「…もしこの上でもなほその科あると思召すならば、かの身を召し進ぜうずるか？次にまた刀の儀は、やがて身内に預け置いてござる。これを召出だされ御覽ぜられて、刀の実否によつて、科の御沙汰をもなされうずるか。」と、申されたれば、(9-3)
- (8) [忠盛その時] 帝王之を聞召されて、「げにもそれは尤もちや。まづさらばその刀を取寄せよ。」と仰せられて、御覽なされるれば、上は鞘巻の黒う塗つたに、中は木刀に銀箔を押し差されてござつた。(9-10)
- (9) 長兵衛あざわらうて申したは、「さうでござらうず。此の程あの御所をよな／＼ものが襲ふほどに門を開いてまちまらす所に、夜半ばかりによろうたものが庭に乱れ入るを、『何者ぞ。』と問うてござれば、『宣旨のお使。』と申したれども、強盗などと申すものは、或は『公達のごぞつた。』或は『宣旨のお使ぢや。』などゝ申すと、内々承り及うでござるほどに、『宣旨とはなんぞ。』というて切つてござる。…」と申してその後はものをもいはなんだ。(113-2)
- (10) 仁科・高梨などといふものも七千余騎で南の黒坂へ向ふに、我身は大手から一万余騎で向ふが、又一万余騎をあそこ、こゝに引隠いて置いて、兼平といふ者は六千余騎で日宮林に陣を取られてござつた。(164-21)
- (11) [小次郎] 熊谷是を見て、「汝は手を負うたか？」「わう、左手の腕を射させてござる。矢抜いて下されい。」と申せば、熊谷「暫しまて。ひまもないぞ。常に鎧づきせい。矢に裏かゝすな。」などと教へて戦うた。(265-12)
- (12) 国母もつづいて入らせられたを、渡辺の源五といふ者熊手をおろいてお髪にかけ、取り上げ奉る。女房たちの生け捕りにせられてござるが、「あさましやあれは女院でござる」と仰せらるれば、(344-15)

例(7)の主体は「忠盛」であり、忠盛が公卿達に宴会に刀を持って参席したと訴えられ、鳥羽上皇に自分の無罪を主張している場面である。原脚本では、完成相の「あづけをきをはんぬ」として用いられたのを、シテゴザル形が用いられ、アスペクト的に結果存続の意味を表わしている。

例(8)は、忠盛が公卿達に宴会に刀を持って参席したと訴えられ、鳥羽上皇にその刀を見せる場面である。アスペクト的意味は「忠盛が刀を差している」という変化した結果の状態に重点を置く結果持続である。

例(10)は、木曾軍と平家軍が加賀・越中の国境砥浪山の付近で対陣している場面である。原脚本では、はだかの形の「とる」が用いられ、運動のあり方、ないしはその経過がどのようなものであるかということにかかわらず、運動を一般的に支持する一般的事実の意味を表わしているが、天草本ではシテゴザル形というアスペクト形式をとっており、結果存続の意味を表わしている。なお、そのテンスの意味も過去というくいちがい

がみられるが、そもそも原拠本とはアスペクト的意味からしても異なっていることもあり、ここは天草本の作者が原拠本とは違う解釈をしていると思われる。

1. 3. 単なる状態

単なる状態の意味を持つ例は、11例あり、似る、見えるなどの動詞と接続する。

(13) [五海女] その時上下の人々火をともしこれをみるに、頭は猿、軀は蛇、足手は虎の姿で、なく聲は鶴に似てござる。(142-18)

(14) 法皇の御所になつた寺には家のうちには皆人が居あまつて、庭から門外までびつしと満ち満ちてみた所で、比叡の山の繁昌、門跡の面目と見えてござつた。(197-11)

例(13)の主体は「五海女」である。頼政は弓の名人であつて、近衛天皇および二条天皇の代、天皇をおびやかす怪鳥（五海女）を退治し、その様子をみる場面である。「似てござる」は、運動の成立を前提としない持続を表わしているの、アスペクト的には単なる状態の意味である。

(14)は、法皇が鞍馬の寺から比叡の山へ行つたことを聞いて、都の関白や公卿たちをはじめ、大勢の人が集まつて、これは延暦寺の繁栄、座主明雲の名誉と見えたと言う場面である。「見えてござつた」はアスペクト的に単なる状態の意味を表わしている。

1. 4. パーフェクト

経歴・記録や痕跡などを含んだ動作パーフェクトの意味を表す例は、110例であり、申す、着く、参る、逃げ去る、死ぬ、書くなどの動詞が用いられている。

(15) 重盛の方よりも、「いかにもして都近い片山里におき奉らうずるとさしも申しつれども、かなはぬ事こそ世にある甲斐もござなけれ。御命ばかりは申し請けてござる。」との文を送られた。(55-18)

(16) さうござつて俊寛僧都と、康頼と、この少将相具して三人薩摩の鬼界が島へ流されてござつた。(60-5)

(17) 夜を晝にして急いで下つたれども、心にまかせぬ海路なれば、浪風を凌いでいく程に都をば七月の下旬に出たれども、九月の二十日ごろにやうやうと鬼界が島には着いてござる。(73-2)

(18) 「有王が参つてござる。多くの浪路を凌いで是まで尋ねまゐつた甲斐もなう、やがて憂目を見せさせらるゝか。」と泣く泣く申したれば、(86-18)

- (19) やゝあつて起き上つて涙を抑へて申したは「… そのお文は是へ持つて参つてござる。」というて、取出いたを見らるれば、有王が申すに違はず書かれて、其の文の奥には、「何とて三人流された人の、二人は召し返されてござるに、今までお上りないぞ? … 此の有王をお伴で急いで上らせられい。」と書かれたれば、(89-19) (89-22)
- (20) あはれや、有王は俊寛僧都の遺骨を頸に懸けて、高野へ上つて、奥の院に納めて蓮華谷で法師になり、諸国を修行して主の後世をとむらうて果ててござる。(92-19)
- (21) 漬盛、舞に愛でられて、仏に心に移されたれば、仏申すは、「こはされば、何事とござるぞ? もとより私は推参の者で追ひ出だされませうずるを、祇王御前の申状によつてこそ召し返されてもござるに、留め置かせらるゝならば、祇王の思はれうずる心の中も恥かしうござらうず。… 」と申したれば、(96-21)
- (22) 競畏まつて申したは、「日ごろは何事もござらば、真先きをかけて討死をいたさうと存じたに、今度は何と思はれてござるか、終にかうとも知らせられなんでござる。此の上はあとを尋ねまらしてゆかうずることでもござなければ、留まつてござる。」と申したところで、… 競が申したは、「宮また三位入道殿も三井寺にと承つてござる。定めて今は討手を迎へられうずれば、三井寺法師を初めてよからうずるものを選討ちにいたさうず。さりながら乗つて事にあはうずる馬を親しい奴原に盗まれてござる。お馬を一匹あづけ下されうずるか。」と申したれば、(118-6) (118-20) (118-24)
- (23) その大将には維盛、副將軍には通盛、其の外の一門を差添へて、都合その勢十万あまりで都をたつて北国へ赴かれた。その道すがら人数があれたによつて民百姓もあまた逃げ去つてござる。(161-23)
- (24) 総大将の義清きいて、「安からぬ事かな。」というて、主従七人小舟に乗り移つて、まつさきに進んで戦うたが、なんとかしつらう、船をふみ沈めて皆死なれてござる。(210-6)
- (25) 日記を抜いて御覽ぜらるゝにも、「宇治川の先陣佐々木の四郎、二陣梶原源太。」と書かれてござつた。(237-21)

(15)は、重盛のとりなしにより、成親は死罪をまぬかれて流されることになり、そのことについて重盛から手紙をもらう場面であり、例(16)の主体は、「俊寛」「康頼」「成経」の三人であり、成経が俊寛、康頼とともに鬼界が島へ流された場面である。この例は、原拠本のケリ形と対応しており、過去形のシテゴザッタが用いられている。アスペクト的には運動の成立に重点を置くパーフェクトの意味を表わしていると思われる。

(18)は、有王が自分の主人である俊寛僧都に会う場面である。「参つてござる」が用いられ、結果の報告の意味を持っている。また、両方とも原拠本のシテ候形に対応する

例である。

(19)は、俊寛に仕えた有王が鬼界が島に渡り、俊寛に会って、その間のことやた一人残った娘からの手紙を渡す場面である。「持つて参つてござる」の主体は「有王」であり、「召し返されてござる」の主体は「康頼」「成経」である。両方ともパーフェクトの意味を表している。

例(20)は、有王が俊寛僧都の死んだ後、後世の菩提を弔っている場面である。原拠本ではケリ形が用いられているが、天草本ではシテゴザルで用いられており、過去形を使わずパーフェクトの意味を強調しているという可能性もあると思われる。

例(22)は、宗盛が頼政の子仲綱の愛馬を無理に奪ったことがあったが、競が宗盛の愛馬をだましとって仲綱の恨みをはらそうとする場面である。「留まってござる」「承つてござる」「盗まれてござる」は、それぞれ結果報告に該当するパーフェクトの意味を表している。

例(23)は、平氏が諸国の軍を召集して木曾を追討に出発するが、物資を道々徴発したので、人々が堪えきれなく逃げ去ってしまう場面である。ちなみに、原拠本で一般的事実の意味を表わしているはだかの形の「逃散す」が、天草本では「逃げ去つてござる」として用いられ、パーフェクトの意味を表わしている。

(24)は、屋島にいた平氏が勢力を回復したので、木曾が追討軍を派遣するが、備中国水島で激戦が行われ、源氏側が大敗する場面である。両方とも原拠本ではケリ形が用いられているが、天草本では場面を再構成する際、シテゴザルを用いながら、後の段階において何らかの効力をもつ運動が先立つ段階において成立したことを表わすパーフェクトの意味を持っていると考えたい。

1. 5. 完成相

完成相には、シテゴザル形をアスペクト的意味により、分類した結果、テゴザルがアスペクト的意味よりは、単なる丁寧・丁重の働きをされると思われる例を挙げることにする。例えば、原拠本でケリ形が用いられており、天草本のなかでも運動の始まりや終わりなどには焦点をおかず、単なる過去の例にしか判定できないもの((32))である。また、ただテンス的な区別のみあると思われる形容詞的な意味を持つ例((26)(27)(31))なども含まれている。

(26) 関白殿の御出ともいはず、一切下馬の礼にも及ばず、駈け破つて通らうとする所で、暗さは暗し、しかしか入道の孫とも知らず、また少々は知つたれども、素知らずして、資盛の卿を始めとして侍どもみな馬より取つて引落いて大きな恥をかゝれてござつた。(15-12)

- (27) 「さて経遠・兼康に向うて、けさ成親卿に情なう当つた事は返す返す奇怪な。重盛がかへりきかうずる所をば何とて憚るまいことは？片田舎の者はかうあるぞ。」といはれたれば、経遠も兼康もともに恐れてござる。かやうにあつて重盛は立帰られた。(33-9)
- (28) 宰相中門に入られたれども、清盛対面もせられず。季貞を以て申入れられたは、「由ないものに親しうなつて悔しうござれども、今更かひもなし。相具しさせてござるもの、このほどは悩むことのござつたに、… 」と申されたれば、(38-14)
- (29) やがてそこに閉ぢ籠つて、うとましかつた昔を思ひ續けて、宝物集といふ物語を書きたてられたと聞こえてござる。(83-5)
- (30) 競畏まつて申したは、「日ごろは何事もござらば、眞先きをかけて討死をいたさうと存じたに、今度は何と思はれてござるか、終にかうとも知らせられなんでござる。此の上はあとを尋ねまらしてゆかうずることでもござなければ、留まつてござる。」と申したところで、(118-4)
- (31) [衆都] さて肥後守といふ者を西国へ下されてあつたが、これは鎮西の謀叛を平げて、菊地ぢやは、原田ぢやはなどいふものを先きとして、三千余りの者を引連れて、都へ上つたによつて、西国ばかりはわづかに平かなれども、東国、北国の源氏はいかにも鎮まらいで、氣遣ひをせられてござつた。(177-9)
- (32) [木曾] 「なに、どこも車であれば、すみづをついて下るるに、むつかしい事があらうぞ。」というて、遂に後ろから下りられてござつた。(208-13)

例(31)は、康頼が東山双林寺に落ち着いて宝物集という物語を書いたことを語り手が解説するようなところであり、「聞こえてござる」は一話が終わるたび、用いられる表現である。また、原抛本には存在しなく、語り手である喜一検校が右馬允に対し、敬意をもって使われている。

例(32)の場合、原抛本をみると、「如何車であらむがらに、素通をばすべき」とて、終に後より下てけり。(竹・八・十五ウ)のようにケリ形に対応しており、下りられてござつたという述語のなか、テゴザルはアスペクトの意味より単なる丁寧・丁重の意味として捉えうる例である。

2. 『大蔵虎明本狂言集』

2. 1. 進行

虎明本のなか、アスペクト的に進行の意味を表しているのは65例があり、そのなか、「かしこまるゝてござる」が41例を占めており、他には叩く、出る、通るなどの動詞

が用いられている。

- (33) [加賀]おわび事がならずは、かしこまつて御ざる (餅酒)
(34) [太郎冠者]誠にいかう水がで御ざる (あかどり)
(35) [太郎冠者]わたくしも御秘蔵のお太刀をぬひて、さんさんいきりちらひて、そこをとおつて御ざる (空うで)
(36) [医師]身共はくすしで御ざるが、都にて身体ならぬ故に罷下つて御ざるが、只今の様子みてきもをつぐひて、是にみまらす (かみなり)
(37) [出家]某いまだ都を一見仕らず、此度罷上り爰かしこをのこらず見物致てござる程に、追付国本へ罷下らふと存るが (しゅじやう)

例(34)は、太郎冠者が川に水がたくさん流れているところを目にしている場面であり、進行の意味を表している。

2. 2. 結果存続

結果存続の意味を表す例は、62 例があり、上接する動詞は、ひろがる、付く、明ける、あまる、ひろう、建てるなどである。

- (38) [太郎冠者]実も誠にしたかにひろがつて御ざる、さいぜんはふしんに御ざつたが、今不審がはれて御ざる、それについてこのみが御ざる (すゑひろがり)
(39) [太郎冠者]こひしくは、とふてもきたれ、いとまではおぼえてござるが、あとを忘れて御ざる (いもじ)
(40) [男]申々、れうじな申事なれども、今夜清水にこもつてござれば、西門にたせられたを、つまとさだめひとの御むさうでござるが (二九十八)
(41) [所の者一]さあるによつて、此程小庵をたて御ざるが、いまだ是に家出をおかぬ程に (腹不立)
(42) [亭主]尤でござる、去ながら、行暮て御ざるほどに、やどをかりたさに申 (地藏舞)
(43) [主]おそひ、もはやまいらふ事じやが、さいぜんさけにたべえひて御ざる程に、なんといたひたぞ (ぬけがら)
(44) [太郎冠者]夜があけてござる (くらままいり)
(45) [出家]もはや日もさがつてござれ共、かなはぬ用なればぜひもござらぬ、急でまいらふ (あくぼう)
(46) ごふくはこなたにおさまつてござるそれこそめでたけれともとむるぞ (くらま

いり)

(47) [太郎冠者]御存のこたく、すねにあかどりがきれてござる所で、水のみまらずれ共、六こんへこたえてうづきまらするほどに、ましてやわたる事は、中々なりまらせぬ (あかどり)

(48) [太郎冠者]くじが一つあまつてござるが、何といたさうぞ (くじざい人)

例(38)都へ末広がり (扇) を買いに行った太郎冠者が、都の売り手にだまされて古傘を買ってしまう場面で、傘が広がっているという意味でアスペクト的に結果存続の意味を表している。

(43)は、酔っているという意味であり、(44)と(45)は「夜が明ける」「日が下がる」という意味を持っているため、結果存続の意味に当たる。

2. 3. 単なる状態

虎明本で単なる状態を表すのは7例あり、違う、過ぎる、優れるなどの動詞が用いられている。

(49) [太郎冠者]いやあはせられぬ事は御ざるまひ、おいろがちがふて御ざる (しみづ)

(50) [夫]おんなのかけでいまゝで某は、らくらくとすぎて御ざるに、あれがいずはそれがしは何共なるまひ、参るほどに是じや、もの申 (いしがみ)

(51) [出家]さやうにござらふ、こなたはきようこつがら人にすぐれてござる程に、弓をようあそばさふ (名取川)

例(49)は、顔色が違っているという意味であるため、単なる状態の意味を表す。

2. 4. パーフェクト

アスペクト的に経歴・記録のようなパーフェクトの意味を表す例は130例あり、そのなか、参る、着くのような移動動詞が37例、申すのような通達動詞が25例、使われている。

(52) [越前]それは日本一の事で御ざる、只今ひとり事にも、よひつれもがなと申て御ざるが、幸の事おとも申さう、さらはかう御ざれ (餅酒)

(53) [太郎冠者]もしふくをむりにとらせられうならば、ふくわたしといふ事をいふてわたせ、さなくはなわたひそと仰られて御ざる (くらままいり)

- (54) [太郎冠者] いや急でまいらふ、参るほどに都へ上り着て御さるが、はりだこはど
 こともとに御さるもぞんぜぬ (はりだこ)
- (55) [亭主] 此しゆくのおわかひ衆が、何としてきかれたやらん、おちごさまのおやどを
 とらせられたと申ほどに、さかづきをたべたひと皆々参られてござる (老武者)
- (56) [夫] 女共になもつて出そと申たれ共、きかずにもつて出てござる、かまいてまい
 つてくださるゝな (河原太郎)
- (57) [奥筑紫] 身共はおく筑紫の百姓で御さるが、いつも御年貢にから物をそろへもつ
 て参る、則駄につくつてみねんぐうはさきへのぼせて御さるが、そなたはみねんぐ
 うに何をあげさせらるゝぞ (つくしのおく)
- (58) [太郎冠者] 畏てござる、やれやれうれしや、めんめんまいらふかと存たれば、
 ひまがあひた、申々はや皆是へござつてござる (せんじ物)
- (59) [客人一] 各も御左右がなひと仰られて、只今それへ御ざらふと仰られて、身が所
 までよつて御さる、只今それへおとも申さうと申せ (くじざい人)
- (60) [太郎冠者] さやうのしさいはぞんぜぬ、上下によらずもちいてまいる程に、我等
 もくだされてござる (どんごむさう)
- (61) [博勞] 此くびにかけたは、くつわと申物じや、このくつわをもつて、今までとせ
 いをおくつて御さる、此くつわをかめは、ひるさもやむ、のどのかはきをもたすか
 り (ばくらう)

例(52)は、いい道連れがほしいと言っているという意味で、(53)は、渡すなど仰せら
 れているという意味で、通達動詞(対象無変化動詞)のためアスペクツ的にパーフェク
 トに該当する。

例(57)は、年貢をさきへのぼさせているという意味で、(58)の本動詞の「ござる」は、
 「着く」という意味で用いられている。

例(61)は、生活をしてきたという意味で経歴を表すため、パーフェクトの意味をもつ
 ことになる。

2. 5. 完成相

天草本と同じく、シテゴザル形のなかのテゴザルがアスペクツ的な意味を持っておら
 ず、丁寧・丁寧の意味を担うと思われる例などを挙げることにする。

- (62) [太郎冠者] 七八人も十人もござらふかと存たが、私をめぐけて、道のはたにふし
 ていてござる程に、私が言葉をかけて申様は、そこなものはなにものぞ (空うで)
- (63) [主] 罷出たる者は、洛中にすまる致すものにて候、去程に当年は、某がぎをんの

とうにあたつて御ざあれ共、今日に至るまで、わたり物の様子をもだんかういたさぬ（くじさい人）

(64) [和泉]中々、それがしがの、はつがんをあげて御ざる、さうおこころやれ（雁かりかね）

(65) [太郎冠者]何のいんぐわやら、かやうのつらになつて御ざる、御門ばん成共、お子さまのもりなりともいたしまらせう（ぬけがら）

(66) [どん太郎]某は上京下京に、女共をふたり持て御ざるが、どちへ参らふずるぞ（どん太郎）

(67) [夫]むりにいぬると申て、いゑでをはやいたひて御ざるによつて、何共仕らふやうが御ざなひ（いしがみ）

(68) [太郎冠者]さやうの事はぞんぜひで、両がんの事かと思ふて、きもをつぐひてござる（すゑひろがり）

(69) [所の者一]聞分て御ざる、扱はとめてがあらはとまらせられうとの御事で御ざるか（腹不立）

(70) [出家]お心なしは有がたふ御ざれ共、おんじゆかいをたもつて御ざる程に、なりませぬ（地藏舞）

例(62)は、アスペクトの意味をもつ「ふしている」にシテゴザル形が付いた例文であるが、テゴザルは単なる丁寧・丁寧表現であると思われる。

(64)の場合も、はつがん（初雁）をあげるからそのようにご承知くださいという意味で単なる丁寧の意味と捉えられる。また、(66)の「持てござる」はただ存在動詞の「いる」の意味を表していると思われる。

例(67)と(68)も、アスペクト的な意味よりは、「早くする」「非常に驚く」のような状態を説明しているだけである。

(69)は、本の解釈によるとわかりましたという意味に、(70)は、酒を飲まないことを守っているという意味である。

3. おわりに

これまでシテゴザル形の用例を分析した結果は表2のようである。表2によると天草本に比べ、虎明本になるとアスペクト的に進行（5.3%→21.1%）や結果存続（4.2%→20.1%）の意味を表す例が飛躍的に増えているのが窺える。

	進行	結果存続	パーフェクト	単なる状態	完成相	計
天草本	10 (5.3%)	8 (4.2%)	111 (53.4%)	11 (5.8%)	59 (31.2%)	189 (100%)
虎明本	65 (21.1%)	62 (20.1%)	140 (45.5%)	7 (2.3%)	34 (11%)	308 (100%)

<表 2>

なお、シテゴザル形のなかのテゴザルがアスペクト的な働きをしておらず、単なる丁寧・丁寧表現とも捉えうる例が存在し、それは『天草版平家物語』と『虎明本狂言集』からも共通的にみられる現象である。つまり、この時代のシテゴザル形は敬語形でありながら、アスペクトの意味を表しているという可能性があったが、実際の調査結果、アスペクト形式とは言えない（完全に文法化されていない）状態とも言えるだろう。但し、天草本より虎明本のほうはその比率が低くなっている。(31.2%→11%)

今回は、天草本と虎明本のシテゴザル形のための議論に留まっているが、他の敬語動詞の含んだ「シテ+存在動詞」との比較、時代別の変遷も視野にいれ、考察することを今後の課題とする。

[注]

1 『邦訳 日葡辞書』(1980) 岩波書店による。

2 角川古語大辞典には、次のように説明されている。「ござある」の転。中世末期から「ござある」と並行して用いられ、最初は尊敬を表すこともあったが、次第に丁寧語化して、ことに多用される狂言では既に丁寧を表すのが普通である。…

3 現存する『平家物語』の中には、『天草版平家物語』と全巻を通して一致する本はないが、清瀬(1982)によると、天草本の著者ハビアンが使用したと思われる原拠本の文章の概要は、およそ次の通りである。

平家物語 (原拠本)	天草版平家物語
覚一本 巻第一～巻第三	巻第一～巻第二・一
百二十句本 巻第四～巻第七	巻第二・二～巻第三・八
竹柏園本 巻第八	巻第三・九～巻第四・一
百二十句本 巻第九	巻第四・二～巻第四・二十八

4 パーフェクトは経験・記録などを表す動作パーフェクトや派生的意味である反復などを称すること

にする。

[参考文献]

<資料>

江口正弘 1968『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院

池田広司・北原保雄 1972『大蔵虎明本狂言集の研究』表現社

<単行本・雑誌など所収論文>

菊地康人 1994『敬語』角川書店

清瀬良一 1982『天草版平家物語の基礎的研究』溪水社

金水 敏 2004「日本語の敬語の歴史と文法化」『言語』33 大修館書店

——— 2006『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房

工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト- 現代日本語の時間の表現-』ひつじ書房

鈴木 泰 2009『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房

福島邦道 1973『キリシタン資料と国語研究』笠間書院

柳田征司 1991『室町時代語資料による基本語詞の研究』武蔵野書院

山本和子 1955「室町時代の敬語「ござる」「おじやる」「おりやる」について」『日本文学』4 東京女子大学

李 忠均 2008「『エソボのハプラス』における「シテ+存在詞」形式の意味」『日本語学論集』4 東京大学国語研究室

——— 2009「『天草版平家物語』における「シテ+存在詞」形式の意味」『国語と国文学』11 月特集号 東京大学国語国文学会

(イー チュンギョン 大学院人文社会系研究科 博士課程 4年)